

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 15 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520733

研究課題名(和文) 甲午農民戦争における討滅日本軍の地域社会史的研究

研究課題名(英文) Area and social historical study on the Japanese troops for suppressing the second Donghak Peasant War

研究代表者

井上 勝生 (INOUE, KATSUO)

北海道大学・・・名誉教授

研究者番号：90044726

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：日清戦争時、朝鮮ほぼ全域で、東学農民軍が抗日蜂起し、日本軍が殲滅した。歴史から消されてきた抗日と殲滅の史実を明らかにした。

日本軍部隊が編成された四国と東海地方を中心に、地方紙掲載の作戦記事、兵士の書簡、陣中日誌、戦死兵士の碑文、兵士の子孫家などを見いだした。また防衛研究所図書館にて、日清戦争直前、参謀本部で作製された巨大な「朝鮮全図」南北2枚を見いだした。韓国の戦場跡を踏査し、朝鮮全域に広がった抗日と殲滅の具体像を再現した。殲滅作戦の現場が苛酷なジェノサイドそのものであったことを実証した。

研究成果の概要(英文)：While the Sino-Japanese War, the Donghak peasant army rose in rebellion against Japan in almost all Korean areas, leading to the crushing of the rebellion by the Japanese troops. This study clarified the historical fact about the uprisings and crushes of the Donghak peasant army. This research project, mainly in Shikoku and Toukai provinces where the Japanese forces were organized, war correspondences, war diaries, epigraphs for the died the war, articles of local press. At the Library of the National Institute for Defense Studies, found two huge maps, Korean Atlas, south and north, printed by the General Staff Office just before the Sino-Japanese War, And explored the battlefields to reconstruct the images of their resistances and crushes spread all over Korean territories. This study concludes that the operating forces for annihilation were harsh with the Donghak peasant army, leading to a kind of "genocide" in its true sense of the word.

研究分野：日本史

キーワード：日本近代史 日清戦争 朝鮮史 植民地 農民戦争

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者は、これまでの研究で東学農民軍に対する殺戮命令が、大本営から直接に命令されていたことなどを防衛省防衛研究所の大本営史料や現地司令部史料などから実証してきた。こうした命令が、朝鮮各地の討伐現場で、どのように実行されていたのか検証が必要であった。

(2) 従来、通説的には、東学農民軍で強力に抗日蜂起をしたのは、朝鮮西南部の全羅道地域の「南接」勢力と言われてきた。研究代表者は、朝鮮中央山岳部、忠清道・慶尚道などの「北接」農民軍も、さらには、朝鮮北部の黄海道などの東学農民軍も、抗日蜂起を強力に戦っていることを、日本側の防衛研究所史料などから史料紹介し、史料が限られていたが、検証してきた。

### 2. 研究の目的

(1) 大本営の「ことごとく殺戮命令」や、討滅大隊派遣によって、ジェノサイドがなされたとする研究は、日韓で有力になったが、日本の近代史研究では、注目されなかった。日清戦争を清との覇権争いと見るのではなく、朝鮮の抗日、大規模な蜂起、日本軍の殲滅をもう一つの基点として見れば、日清戦争の位置づけは大きく変わる。東学農民軍殲滅現場を、地域史として多様に再現することが目的である。

(2) 東学農民軍の抗日蜂起は、朝鮮西南部で激しく戦われただけではなかった。中央山岳部では「北接」東学農民軍が蜂起し、朝鮮北部では、黄海道農民軍なども激しく蜂起していた。研究代表者のこれまでの史料調査では、各地の農民軍は、互いに連絡して蜂起したことなども分かる。これらをさらに詳しく検証する。

### 3. 研究の方法

(1) 地域図書館や地域文書館の調査を行う。当時の地域新聞の調査を重視する。市町村史も広く調査する。地域で、消されてきた史実の調査であり、記述のあることは希だが、見いだせば、貴重な資料となる。防衛省防衛研究所や国会図書館、東京都立中央図書館などの調査もこれにあわせて行う。

(2) 現地の踏査と現地調査、郷土史家との協力などを重視する。碑文や墓石、新聞記事などを収集し、消された殲滅作戦を再現する。また、韓国の研究者と協力し、郷土史家らとともに、戦場跡などの現地調査を行い、研究を発表し、情報を交換する。

### 4. 研究成果

(1) 東学農民軍に対する殲滅作戦の実状は、予想を超える“凄惨なジェノサイド”であった。これまでの資料は、後備第 19 大隊大隊

長が作戦後口述した講話や、日本軍朝鮮司令部の陣中日誌であり、大隊長の立場による潤色がなされており、しかも作戦現場の討伐状況は明確でなかった。徳島県で見出した兵卒（後備第 19 大隊）の陣中日誌には、討伐現場が詳しく記録されていた。検証すると、ソウルを出軍した直後から集団的銃殺（利川など）があり、村落丸ごとの焼き払い（忠州など）、焼殺（長興など）が記されていた。罪の軽重の取調は、拷問であり、銃剣での整列一斉突殺（海南）も一例が記されていた。凄惨な殲滅、すなわちジェノサイドが、日清戦争時から展開していたことが判明した。これは、日本近代史全体の見方に係わる事実である。

(2) 上の記録に記された現場の討伐状況は、予想を越えたものであって、また地元ですら朝鮮農民軍討伐の事実が消失していることから、記録記事の「裏付け調査」を、部隊編成地、松山市について、日本コリア協会愛媛と愛媛近代史文庫の協力を得て行った。高知県宿毛市で見出した後備第 10 聯隊兵卒の陣中日誌も、同様に記載裏付け調査をおこなった。兵卒の居村出発、徒歩や船での集合地松山への移動、松山三津浜港への上陸、師団司令部への集合、寺院や公会堂などでの宿泊、食堂など、現地で聞き取りをし、日程を検証し、また古地図による調査を行い、裏付け調査をすることができ、記事の正確であることを確かめた。裏付けをするだけでなく、当時の「戦時社会」を再現するという成果もあげている。

(3) 現在、通説的には、東学農民軍の抗日と日本軍の殲滅は、朝鮮南部で起き、朝鮮北部では、一部を除き東学農民戦争がないと理解されている。かつて 1980 年代に、黄海道など朝鮮北部に激しい農民戦争のある事が在日の朴宗根の研究によって指摘されたのだが、朝鮮北部という地域的な条件もあって、事実解明は進んでいなかった。朝鮮北部の農民軍を討伐したのは、後備第 6 聯隊であり、東海・北陸地方出身の兵士で構成されたことが、参謀本部『明治二十七八年日清戦史』や『靖国神社忠魂史』戦死者記録などから判明した。東海地方について、愛知県と岐阜県で地方新聞を中心に調査をして、岐阜県からもっと多くの兵士が従軍していることを見出し、指揮官や兵卒記録を探索する基礎的データを求めることができた。後備第 6 聯隊の指揮官少尉は、作戦後、朝鮮国王に報告を行っている。『岐阜日日新聞』などから、大垣町出身、戦後、地方官に転身したことが分かった。簡単な履歴、写真なども見出した。また、後備第 10 聯隊の大隊長・釜山兵站司令官の出身地が愛媛県の『宇和島新聞』から分かり、地元の協力を得て、地方図書館で大隊長の歌集などを見出した。経歴も記され、作戦後、台湾で占領軍に入って「賊徒」討伐、ついで

日露戦争で激戦に従軍、最上級将校になっていた。日清戦争直後、元の階級のまま退役した討滅専任大隊、後備第 19 大隊の大隊長と対照的であることなども判明した。

(4) 朝鮮北部農民軍を討伐した後備第 6 聯隊の兵士は、東海・北陸の兵士である。最近の研究で、朝鮮北部、とくに黄海道の日本軍兵站線では、東学農民軍が府庁占拠など激しい抗日を戦っていることが指摘されはじめている。東海地方の『扶桑新聞』、『新愛知』などの調査をした。『岐阜日日新聞』には、兵士記録、戦死・戦病死兵士記録がとくに多く見出された。『靖国神社忠魂史』の戦死名簿でも、岐阜県の兵士がもっとも多い。14 の郡、うち町は 3 件、計 18 名の兵士記事を見出した。戦死者は、2 名、黄海道黄州と忠清道槐山での戦死者で、他は戦病死である。今後、地元でもまったく消された殲滅戦争を再現する基礎データである。

(5) 岐阜県立図書館で、忠清道槐山での戦死兵士の碑文拓本記録を『岐阜県下碑文集漢文之部』1937 年で見出し、碑所在の村落(加茂郡富加町内)で碑本体を探索した。見出すことはできなかったが、地元で討伐部隊の歴史の記憶が残っていないことが分かった。また、『岐阜日日新聞』にて、連載小説「日清軍談偉勲鑑」の挿絵に、電信線を切断する農民軍の挿絵を見出した。当時の農民軍の抗日画像は、見出されていない。農具や竹槍、鎌(電信線に振り上げられている)を構えた挿絵で、はじめて見出された抗日中の農民軍画像である。

(6) 後備第 19 大隊は、四国四県の混成部隊であり、後備第 10 聯隊は、四国四県と広島県の混成部隊である。愛媛県で、日本コリア協会愛媛の市民等によって、兵士の墓碑や石碑、子孫の探索が進んでいる。歴史研究者として、現地調査に加わった。あらたに後備第 19 大隊 3 名の墓碑 2 つと石碑 1 つ、後備第 10 聯隊兵士の墓碑 1 つが見出された。子孫家を訪ね、聞き取りを行うことができた。兵士が、朝鮮の殲滅作戦を語ることがなかったことが判明した。朝鮮へ出軍したことも語られなかった。当時の墓碑などには、「朝鮮出軍」や「東学党討伐」が明記されていることもあわせて、歴史記憶の消失について、検証する基礎データである。一方、参謀本部編纂の『明治二十七八年日清戦史』全 8 巻を、「農民軍殲滅作戦の記録」という観点から調べた。参謀本部は、兵站の変遷のところで、殲滅作戦全般のごく簡略な、しかし整理された概略を記述していた、しかし、戦史としても、また巻末の総年表にも、朝鮮抗日農民軍殲滅の史実を記載していなかった。台湾の「賊徒討伐」は詳しく叙述されたのであり、抗日と殲滅作戦の隠蔽がなされたことを検証した。

(7) 東学農民軍討伐に従軍した兵卒は、後備兵で、現役、予備役を経た高齢の兵士たちで、多くが家族持ちであった。地方新聞を調査して分かることは、一家の中心を失った留守家族の、貧窮を報じ、救助を呼びかける記事と、戦時の徴兵逃れの記事である。後者の、「戦時応召不応」は、地方新聞によって報ずるものとそうでないものがある。愛知県の『新愛知』は、多数の徴兵逃れと投獄を、「弱虫」として報ずる。「例の召集に不応」とか、「珍しくもなけれども」という文言にも戦時の徴兵逃れの多さが分かる。開戦後、3 ヶ月を経た 10 月、平壤の勝利後でも、「戦時徴兵不応」は多発していた。年齢は、30 歳前後、高齢の後備役該当兵卒が多い。愛媛県では、戦争直前、二つの村の徴兵適齢者全員が、「ことごとく不合格」を神社へ「祈願」する記事を見出した。一方、朝鮮の東学農民軍は、竹槍、火縄銃で、朝鮮の海岸端まで、逃亡せず、最後まで抗日を戦う。どちらも「貧しき兵士」であったが、軍事力の性格は、根本から違っていた。

(8) 後備兵に、小作人や、日雇い、蒔蒔屋などの「貧しき兵士」が多いと各地方紙で報じられている。『香川新報』の、後備兵の報道は、この事実の背景を説明している。日清戦争の前、徴兵令改定が行われ、戸主の免役が廃止されるなど、徴兵逃れは困難になった。しかし、以前には、一般に「富家の子弟」などは、「何らかの事情を設けて、服役を免れ」ていたのが実状であったという。ところが、貧しい農民は、「方便」を講ずる「余地」がなく、「是非なく就役」したという。そして、高齢で一家を構えたのだが、戸主の徴兵免除がなくなっており、やむなく後備役に就いた。「貧しき後備兵卒」の多いことには、構造的な歴史的背景があったのである。当時の後備役兵卒の実状、また徴兵制の背景の一面を明らかにすることができた。

(9) 防衛省防衛研究所図書館の千代田史料から、巨大な「朝鮮全図」南北 2 枚を見出した。1888 年測量・1893 年製版で、参謀本部陸地測量部が、日清戦争直前に完成させた 20 万分の一地図であった。あらゆる道路と道路の左右、川や山、平地、市街が測量されて、道路は赤、川と海は青、陸地は茶で、山は等高線で記入されていた。かつて朴宗根が、領事館将校が秘密測量した地図が恐るべき威力を発揮したという証言を紹介していた地図の現物であった。千代田史料は、宮内省であり、大本営史料である。形状から、巨大な机上で使われたもので、南海岸は粗雑だが、北西は、鴨緑江まで、北東は、豆満江まで、あらゆる道路左右の測量が完成した、日清戦争遂行の準備を推定させる巨大地図を見出した。

(10) 地域社会史的な事例研究として忠清

道連山戦闘、全羅道長興戦闘などを検証した。東学農民軍が、日本軍の前に、一瞬に四方に現れ、四圍を真っ白にした状況、戦闘地域に東学の組織が伏在し、農民軍を支持していた事実、日本軍の殲滅作戦の長期化、部隊の増援、作戦が凄惨なジェノサイドであったこと、作戦が隠蔽されたことなどを、『明治日本の植民地支配』岩波書店と『東学農民戦争と日本』高文研でまとめて出版することができた。兵卒の陣中日誌の現地での裏付け調査、またはじめて見出した農民軍の抗日状況画像資料、貧しき後備兵卒の構造的な背景、戦時応召不応、徴兵逃れ多発などは、日韓で開催されたシンポジウム研究報告の一部として発表し、研究報告集として刊行された。朝鮮北部黄海道などの「抗日と殲滅」、見出した東海・北陸地方後備兵卒資料は、これから日本軍の東学農民軍せん滅作戦の全貌を再構成し、あらたな研究としてまとめるために、さらに調査を続けているところである。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 8件)

井上勝生、抗日・東学農民戦争、隠蔽された殲滅作戦 日清戦争 120周年にあたって、『在日韓人歴史資料館 10周年記念土曜セミナー講演録・朝鮮近現代史から日本を問う』(在日韓人歴史資料館) 査読有、2015、3-45

<http://j-koreans.org>

井上勝生、日本軍、東学農民軍せん滅作戦の史実(日文・ハングル)、『東学と日清戦争 120周年記念学術会議・日清戦争・東学農民革命と 21世紀東アジアの未来展望』(東北アジア歴史財団、ソウル市・韓国) 査読有、2014、91-138

井上勝生、日本軍の東学農民殲滅作戦調査から東アジアの未来へ(日文・ハングル)、『東学農民革命 120周年記念国際学術大会・東学農民革命、平和・和解・創世の時代を開く』(東学農民革命記念財団、ソウル市・韓国) 査読有、2014、71-108

井上勝生、歴史研究の最前線・もう一つの日清戦争、歴史地理教育 818、査読有、2014、72-77

<http://www.jca.apc.org/rekkyo/>

井上勝生、歴史の舞台・東学農民戦争の遺跡を歩く、週刊日本の歴史 40(朝日新聞出版) 査読無、2014、27-27

<http://publications.asahi.com/>

井上勝生、日本開国史を見なおすために江戸湾を舞台に、開国史研究 13、査読有、2013、6-40

井上勝生、近代アイヌ民族のたたかい 十勝アイヌを中心に、『北海道を平和学する』(法律文化社) 査読無、2012、9-26

<http://www.hou-bun.com/>

井上勝生、東学農民軍を包圍殲滅した日本軍の史料を探索して(ハングル)、『日清戦争期の朝鮮の東学農民革命と愛媛』(東学民族統一会、ソウル市・韓国) 査読有、2012、15-24

[www.donghaktongil.or.kr](http://www.donghaktongil.or.kr)

[学会発表](計 6件)

井上勝生、東学農民戦争と愛媛、日本コリア協会愛媛・近代史文庫共催、招待講演、2015年3月1日、コムズ(愛媛県・松山市)

井上勝生、日本軍、東学農民軍せん滅作戦の史実、東北アジア歴史財団・韓国史研究会共催、招待講演、2014年11月21日、延世大学、ソウル市(韓国)

井上勝生、日本軍の東学農民殲滅作戦調査から東アジアの未来へ、東学農民革命記念財団・全国東学農民革命遺族会共催、招待講演、2014年10月28日、国立中央博物館、ソウル市(韓国)

井上勝生、抗日・東学農民戦争 隠蔽された殲滅作戦 日清戦争 120周年にあたって、在日韓人歴史資料館主催、招待講演、2014年8月2日、在日韓人歴史資料館(東京都)

井上勝生、東学農民軍を包圍殲滅した日本軍の史料を探して、東学民族統一会・愛媛大学東北アジアの平和研究会・日本コリア協会愛媛共催、招待講演、2012年7月30日、愛媛大学(愛媛県・松山市)

井上勝生、日本開国史を見なおすために、横須賀開国史研究会主催、招待講演、2012年5月26日、ヨコスカ・ベイサイド・ポケット(神奈川県・横須賀市)

[図書](計 6件)

井上勝生、オムンハク社(ソウル市・韓国) 明治日本の植民地支配 北海道から朝鮮へ (ハングル) 2014、264

[www.amhbook.com](http://www.amhbook.com)

井上勝生、中塚明、朴孟洙、図書出版モシヌンサラムドル(ソウル市・韓国) 東学農民戦争と日本(ハングル) 2014、61-131 <http://modl.tistory.com>

井上勝生、岩波書店、明治日本の植民地支配 北海道から朝鮮へ (岩波現代全書 11) 2013、249

<http://www.iwanami.co.jp/>

井上勝生、中塚明、朴孟洙、高文研、東学農民戦争と日本 もう一つの日清戦争、2013、51-112

<http://www.koubunken.co.jp>

井上勝生、オムンハク社(ソウル市・韓国) 幕末・維新日本近現代史シリーズ 1 (ハングル) 2013、289

井上勝生、西田秀子、阿部敏夫、札幌市、札幌市平和都市宣言 20周年記念・語り継ぐ札幌市民 100人の戦争体験(監修) 2013、上 383・下 385

[産業財産権]

出願状況(計 件)

取得状況(計 件)  
〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

井上 勝生 (INOUE, Katsuo)

北海道大学・名誉教授

研究者番号：90044726

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：